

# 明治大学文学部史學地理學 研究發表要旨

- 1 日本奴隸制下に於ける露口についての一資料  
日本史四年 熊本増夫 — 1
- 2 梁啓超の歴史思想  
東洋史四年 斎藤 修 — 1
- 3 ナチス政権についての一考察  
西洋史四年 真山和子 — 2
- 4 古墳時代後期に於ける刀劍の分布  
考古学四年 川崎澄夫 — 2
- 5 神奈川県津久井郡二村に於ける農業經營の比較  
地理学四年 小口 寛 — 3
- 6 五世紀に於ける東國の地位  
日本史 志田謹 — 4
- 7 道元の現代的批判  
日本史 小黄初枝 — 4
- 8 前漢鏡銘文と当代の思想に関する断想  
東洋史 河野茂子 — 5
- 9 ユートピアに現われたヒューマニズムの特質に就て  
西洋史 舟川 清 — 6
- 10 東京新田の所謂窮民の構成と離村との関係  
地理学 内田 実 — 6
- 11 三世紀の畿内地方  
考古学 杉原莊介 — 7

1956年12月1日

於：大学院2階南講堂

共 催

駿台史学会：日本史・東洋史・西洋史・考古学・地理学各研究会

日本奴隸制下に於ける  
寄口についての一資料

日本史四年  
前本增天

日本奴隸制下に於ける  
寄口についての一資料

日本史四年 前本増天

上代の戸籍、計帳によ、斯曰本古代家族の実態を知りうるが、その構成員である寄口の持つ意義は極めて高い。何故ならば律令体創初期に於て、すでに班田農民の階級分化が行われ始めると、寄口の歴史的存在は、それの最も具体的事実を示すからである。

本報告はこの上うな重要な性質を持つ寄口について、その歴史的性質を明らかにすべく戸籍、計帳を中心として寄口に関する資料を整理した結果を發表しようとするものである。これもとて日本奴隸制の特殊的情緒を去ぐる事無いの付当然であるが、只感想的に述べる事を許されば次の様になら。

# 梁啟超の歴史思想

東洋史四年 藤齋

的性格は勿論、律令体制の全構造的把握の元に解明せねばならぬものであり、それは今後の私の研究課題で、石母田、藤間、堺氏等先掌の業績をふまえて研究して行かなければ考え得る。

彼は所謂改良主義者であり、政治家、学者としてよりむしろ啓蒙家として評価されており、その一般に及ぼした影響は非常に大きかった。彼の著作は總て飲水室全集に納められていて、この中で清代理学、歴史及び中国歴史研究法が知られてくる。歴史の着述としては二の他に戊戌政變記があるが、中國近代研究法は西洋歴史学の方法論を初めて中國に輸入したものとして重要である。

今、この著書によつて、彼の歴史思想を紹介し、その進歩的な面と、結局彼が改良主義者として起える事の出来なかつある。

は豫算を明らかにし、歴史家としての深浮きを再評価して貰えりと恩づ。

## ナニヌ政権成立についての

一  
考  
察

西漢史四年  
真山

古墳時代後期に於ける  
刀剣の分佈

刀劍之分布

卷之三

真山和子著  
一考察

國民社會主義トキツ學傳者堯堯(ヤニス)は、一九一九年にドイツの敗戦と云う國家的悲運上、才一次大戰後の混亂期に於ける中産階級の急激な没落を背景として、ミコノヘンに誕生して以来、國粹主義とナチズの本質とは全く異た社会主義と互結につけた網羅を擡げ、一三二四億全マルクといゝ巨額な賠償金の支払や、戰勝國の種々な压迫に対する國民の烈しい群衆思想に訴え抗軍部の援助による派手な宣伝で、急速な發展を遂げた。更に、一九二九年に始まり、次第に深刻化した世界經濟恐慌は、ドイツ經濟界に破産の危機をもたらし、社會革命を恐れ、資本家、エントリによって十キス政権を樹立せらるに至つた。ここで民主政治がこの危機を打開し得るに、フランクフルトの政治的支配形態にまで成長しき過渡をドイツ資本主義の脆弱性と反アーリングトの弱点を中心以檢討して行き、十年不政権成立の意義をいかでも提えた。

新らしい佛教思想の伝来との浸透の影響によって、畿内に於ては摩牛子城古墳や中尾山古墳を最後として古墳葬式の風潮が行われなくなり、七世紀中頃より事で云々。ところが畿内より遠く離れた地域、例えば関東地方や東北地方等では、まだ盛んに古墳の築造が行われていた。それと共に遺物の面に於ても、関東及び東北地方独自と云わざる各種類のものが現わられて来る。刀劍の類で云えば、頭椎太刀、土頭太刀、方頭太刀等が挙げられる。中でも特殊な刀と云われてい多歯手刀は東北地方独自に発達したものと並産えられていふ。

この様な結果は主として遺跡、遺物の分布研究から得られたものである。考古学研究に於て分布研究は基本的な方法の一つであるが、單に地図上に表現された「東の群」がその才の過去に於ける存続状態であつたと考える段にはゆがない。特に腐朽度の高い鉄製品では、石器や土器に対する異常に表わされない幾つかの條件を考える時に、遺跡或は遺物分布圖とは別に使用春園をも

か可きものと想定する事が出来る。こうした考え方をすれば、前に挙げた遺物特に薦手刀に対する從来の考え方にも疑問が持たれて来るし、又新らしい考え方にも革新的なものが生まれる。即ち西日本の諸地域では使用され事のなかつたと云われてゐるこの種のものが、実際には畿内を初め西日本各地にても使用された可能性が充分にありうる事はなる。それと共に、西日本でそれが遺物として残存しなかつた理由も、別の面から証明しうると考える。

神奈川縣津久井郡二村に於ける

## 農業經營の比較

本郡に於ける主産業は、青野原は本郡でも最も奥地にあり、三沢よりも不便で、入出で三十分も余計かる。交通は三沢から横浜線橋本駅迄二十五分、そこから水神奈川へ五十分、相模原四分、八王子へ十五分で出られ、八王子へ出る方が近くで便利である。  
さて青野原は、郡の半島でも最もよくかつ強度にこの郡の性格を表わしている。その特色は、①山地を主とし耕作地は河岸段丘上にある。②兼業は山林關係と乳牛飼育を中心とする。③食糧の自給も完全でなく兼業に賴る農家が多い。これに對して三沢は、①他村に較べて割合に広い耕地を持つ。②兼業は蔬菜栽培・乳牛飼育、勤め人・山林關係等である。

農業經營についてには、その改善を目的として各地で機械の導入及び有畜農業化に閣する研究が進んでいた。私は、有畜農業化されつゝある農村を、その位置と生産物及消費地との関係について考察して見た。研究の対象地域は、神奈川県津久井郡で農業人口構成と乳牛飼育数の对照的な、青野原村と三沢村を選んで比較調査した。

津久井郡は関東山地の山かちの所で、耕  
地は相模川の河岸段丘と関東山地末端部か  
ら相模野台地へ移る傾斜の中谷やかなな

② 莊業は蔬菜栽培、乳牛飼育、勤め人、山林木業等である。

— 3 —

五世紀に於ける東國の地位

東國の地位

五世紀以前に於ける古代史の光明に当つては、戰後はげしゝ論争を提起した英雄時代の設定があるが、かく、古英雄時代の解明について、文学的形象として、或は歴史科学生の良何によしゝ民族主義的偏向に貫ぬかれて、其を見逃す事が出来ない。故に古代國家の成立過程に大きな存在を意味とれ五世紀の東國の地位について、文献古代伝承、そして文献学と相助けて歴史の具体的な展開の跡を実旋する序古学を加味して考察を試みて見ぬのである。この小論では、好太王碑文の承す如く、四世紀末より五世紀初頭にかけての朝鮮経略の失敗と五世紀初頭に行われた東國経略の特異性と必然性を窺明し、更に五世紀の東國経略が社会の基本的生産要素内奴隸的なものが代国家統一と強化をもたらし、五世紀の王权をデイスホティックな方へ規定されたのであることを概説的に触れて見ぬのである。

## 道元の現代的批判

日本史 小説 初稿

現代は凡ての意味で危機の時代であると云われている。現代の政治、経済、科学、思想、文化等の意識は、時代の波によつて根底から動かされてゐる。經濟の面では、失業の事実を前にして、從來の資本主義にかけ無計劃、無統制は殆ど全世界に於て滅し去つたと云うことである。現代はまさしく資本主義の時代、しかもその末期の段階であつて、地球の三分の二が広汎な地域に於ては、既に社會主義國家の段階に入りつつある時代である。この死滅レーフある資本主義經濟のあり方が、何如何なる形で社會主義国家に移行しうるかは過渡的狀態がまさに現代の經濟的、政治的危機を形成していく。又現代の危機は、その最も深い面で捉えるならば、人間の精神の喪失による他人の危機である。資本の集中と独立による大企業は労働する人間に對して、一回の大企業は労働する人間と見るのでなく、容易に独立した人格と見るのはなく、容易にとりかえられる商品とされるに至つた。機械の大企業は、文壇は未曾有の発展を遂げたが、他面、機械それ自身が独立の機能を發揮して遂に人間を支配する後割を演ずるに至つた。この精神の喪失は、資本主義構造においては、階級的道德による人間

さと同時に、鏡そのものの性能が我々日常生活に極めて身近かに由来している故に、当他の金石銘文とは甚だしくその性格を異にしている。即ち吉祥句の羅列に終始した前漢鏡銘文の独自性は、形式主義を挑んだ人間性本末の姿に基く虚心坦壊な願望の吐露と解する所に、この鏡銘を生んだ漢代人の生活、思想が鮮がに浮き彫りに看

精神の劃一的統制と云う形に於て現われ、精神の回復と自由化が叫ばれている。さうした現代の危機相に於いて宗教家道元が、何らかの意味で明日の歴史の禪やかしい未来を解く鍵を発見するものを持ち、人間精神への哀れを回復する糸口を持つ事を見出しえたので、彼の思想の欠点をも指摘しつつ、ほこれを生かしうる道を探求したのである。最後に、現代世界の理想像はいかにあらねばならぬかを前述のヨーロッペにおいておける「科学と宗教、宗教と経済」の面の考察にして、宗教と社会主義的世界への実験的關係を描き出して見な。道元が、現代には生ずるる為には、現代的見地から「宗教に対する印象、社会性の問題の共通の性質の形成について考察する必要があつたからで

前漢鏡銘文と当代の思想に  
關する断想

東洋史 河野清子

中國古鏡の背面文様は銘文が普遍的に見られる様になるのは、前漢代に入つてからのことである。従つて、前漢鏡銘文は古鏡銘文の初期様式として注目される所である。銘文の意味内容は初期様式としての素朴

さと同時に、鏡そのものの性能が我々日常  
生活に極めて身近かに由来している故に、  
当代の他の金石銘文とは甚だしくその性格  
を異にしている。即ち吉祥句の羅列に終  
始した前漢鏡銘文の独自性は、形式主義を  
挑んだ人間性本末の姿に基く虚心坦懐な願  
望の吐露と解する所に、この鏡銘は生んだ  
漢代人の生活、思想が鮮かに浮き彫りに看  
取される。

「常樂未央、千秋万世」大樂富貴、延年益壽」  
「日有吉月有富、衆安寧」宣酒食、居心安寧  
「瑟情、心忘驛、固常然」と謂ふ所尽く當代漢民  
族の現世思想の端的な表出であり、之の想  
想は後に神仙思想を生み、又道教思想發展  
の基盤となりたのであるが、道教の三教  
術の起源が既に前漢鏡銘文の二言銘に  
見えて、道教思想は既に前漢代人々生活の中  
に十分に醸されていな半実在我々は知る。  
一一の思想が開拓不休なく、思想体系が生  
まれるといつ方釋文を之に供して、後漢代  
の道教主義の衝立を一方の証左としつゝ、  
前漢代人の間に、現世追求の手段としての  
徹底した道教的な思想が氾濫していれ事實  
を既に思想史に補遺したい。

エトピアはあらわれた  
ヒューマニスムの特質について

トトヒテハ  
ヒエーマニスムの特質につ  
西洋史 田川

モアのユートピアについては、従来多く  
の研究が発表されていながら、私はその中に  
独特のヒューマニズムを見出すのである。  
それをエントセアは現われた紛争問題、  
兵問題、外國に対する彼の態度等を通して  
説明しようとするのが、本論の目的である。

東京新田の所謂窮民の構成上

下卷

東京新田の所謂窮屈の構成と  
下流三地全域にそれが名曰小金、佐倉諸  
牧の開発は明治二年民部省開墾局の設置に  
ともない、東京近在の所謂窮屈(力民)と会  
社員(富民)とかく構成された開墾会社により  
開発が始められ、その結果東京新田と呼ば  
れる初富から十余三に亘る各村が作られ  
た。  
一番入植の多い八街道について玉申  
戸籍と甲戸戸籍元帳を資料に、その構成と  
渕村との關係について考察した。それと戸  
籍は明治十九年まで使用されてい  
る。  
家族構成より見一々十一人になんで  
その中三五人が多寡を占める。これが離

村との関係は、多く四人を境として、少くは  
数が多い程、定着率は高い。明治五十年、  
年迄の間に、当初戸数の四八名が離村す  
三九%の多くを起す。その家族構成は一十五  
人が多く、初期入植者とほぼ同数を占め  
る。しかしやはり定着率は多數家核が高  
い。この事は後期入植者が、近在農家出身  
者によつて多数を占められてくる事により  
戦後の開拓と酷似する。職業より見ると、  
東京からの移住者の大部分は商人で、これが  
が離村者の最多を占め、また田士族も離村  
が激しい。全国的に分散した移住者を見ても、  
本邦内に、定着率は高くない。移出先是本  
身地へ帰る者が圧倒的に多いのは当然であ  
ろう。又、他府県の入植者が東京へ行く例  
が認められる。江主の年令は、壯年が多い  
事から見ると、離村は年令よりも出身地と  
職業に左右されている如くである。戸籍に  
逃亡の字句を載見する者は、当時の開拓の  
様相を物語るものである。

弥生文化は二つの中心地を持ちながら、前期・中期・後期と進展した。そしてその中期における北九州の同文化が大陸文化と著しい文種を持ち、又半階級的な社会を現した事は人々よく知るところである。それにも拘わらず、畿内を中心とした弥生文化は北九州のそれより、すでに前期からむしろ優位を持ち続けて後期を経て、古墳時代に及んでいく。そしておそらくそれは後期の終末は三世紀に充分に關係があらう。

魏志の述べるところによれば、邪馬台國が他の地域より移り来る勢力であることをいついては何等の記事もない。又二四七年狗奴國と交戦のことを伝えるのと、女王卑

三世紀の畿内地方  
考古学 杉原莊介

魏志東夷伝の伝える日本は、丁度その三世紀に亘する記事である。年代についても西暦二三九年・二四十年・二四三年・二四年・二四七年に亘る具体的な記事があり、文中の「種禾稻綿麻」「木弓短下長上」「冑棺無槨」「真珠青玉」「朽骨ト占」の記事も考古学的事実と一致し、それが古より信憑の出来るものである事を知る。

ただ問題は、その中心勢力とすつていい邪馬台国が九州地方であるか、畿内地方であるかの解釈に異論があり、日本古代國家への社会發展の、ある重要な段階を示唆する二つの貴重な資料が、充分に利用できまいことは残念なことである。これにつけて、吉墳時代の研究者は、古墳及び銅鏡の分布から、それが畿内地方以外には到底考えられないことをすでに屢々説いている。しかし、この三世紀といふのは弥生時代から古墳時代への過渡期であつて、当時の弥生文化の状態がどの様なものであつたかも充分に理解されねばならないと思ふ。

弥生板化が西暦前三〇〇年前後、北九州地方に先ず発生したものであることは現在まぎれもない事実となりつつある。そして、オニ族的に畿内地方に移植された。

三世紀の畿内地方

考古学者、豪莊翁  
伝える日本は、丁度そ

— 7 —

便が、より大き方文化力を持つ都内地方の  
情勢を何故下報告していいか、私は何時  
も不思議に思うのである。しかし、私は九卅説を  
知経別に大々する方々には、三世紀の  
固持する方々には、三世紀の  
て古代國家文化力を持つ社会が續肉世界方に説を  
て復け北ば幸である。  
あつた二世紀かとを